様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０５２９

研究課題名（和文）日本美術の諸様式をキャッチフレーズ化して感受･理解させる鑑賞教育方法の実践的研究

研究課題名（英文）A practical research of art appreciation method to understand Japanese art by using Catch-Phrases for the various styles of them

研究代表者
有田　洋子（Arita, Yoko）

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０５９８１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本美術の諸様式のキャッチフレーズ化による鑑賞教育方法を考案し、実践してその教育的有効性を実証した。キャッチフレーズは感情語と指示語によって構成されることを確認し、年齢段階に対応した様式把握の方法論に深化･精密化した。まず美術史記述における感情語使用の実態を調査し、次にSD法による児童生徒の日本美術の諸様式に対する1.様式ごとの感情プロフィールと2.学年ごとの感情プロフィールを解明した。そして、キャッチフレーズ用シソーラスの可能性を検討した。教材の作成と授業実践をして、本鑑賞教育方法の有効性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This studies proves the effectiveness of the verbalization in art appreciation lessons, by using Catch-Phrases of Japanese art styles. Catch phrases are made of feeling word and indicating word. Depicting method of styles according to their age levels were deepened, and checked use of feeling word in art history books. The Semantic Differential Method investigation showed that the each style of Japanese art has its own feeling profile to children, and that each school year children's has their own feeling profile to Japanese fine arts. And a possibility of a thesaurus for catch-phrase was considered. Karuta cards and quiz were made as teaching materials to understand styles. Lessons with such teaching materials as above were very effective.

研究分野：美術教育学

キーワード：美術教育学　鑑賞教育　日本美術　様式　言語　キャッチフレーズ　仏像　日本画

１．研究開始当初の背景

日本美術対象の鑑賞教育研究は、現在、美術教育関係学会の大きなテーマとなり、日本美術鑑賞についての発表も増えつつある。平成 20 年改訂学習指導要領にも鑑賞の充実と伝統文化を取り上げることが示された。ただ、その方法論研究はまだ僅かで、「日本美術の何を鑑賞するか」についても日本美術の非完結性及び様式の感受･理解を提案した研究代表者の研究しかない。また、同学習指導要領で示された「言語活動の充実」に関しても、研究代表者は既に平成 21 年から実践研究論文を発表した。それらを参考にした発表が徐々になされつつあるものの、多くは実践報告に止まっている。そのような状況のなか、学術研究助成基金助成金を得て実施した前研究を発展させ、日本美術の諸様式のキャッチフレーズ化の根拠を明確にし、年齢段階に対応した方法論に深化・精密化した鑑賞教育方法を学校現場に提案し貢献したいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、学術研究助成基金助成金を得て実施した前研究を発展させ、日本美術の諸様式のキャッチフレーズ化による鑑賞教育方法の根拠を明確にし、年齢段階に対応した方法論に深化・精密化することを目的とする。研究期間内に次の四つを明らかにする。

1. 美術史記述･実作品の調査による様式記述用語の解明。
2. SD 法による児童生徒の日本美術作品感情プロフィールの解明。
3. キャッチフレーズ用シソーラスの内容の解明。
4. 以上を踏まえたカルタ教材作成・授業実践によるシソーラス及びキャッチフレーズ鑑賞教育方法の有効性の検証。

３．研究の方法

1. 美術史記述と実作品の調査：戦後から現在の各年代の代表的な日本美術史概説書に記述された様式を表す語彙を調査する。コーパス作成･分析を行い、形容(動)詞や擬音語･擬態語に代表される感情語の様式ごとの特徴や頻出度等を明らかにする。実作品も調査してその適合性を確認する。
2. SD 法による様式感受の実態調査：小･中・高校生の全学年の児童生徒及び大学生・専門家はそれぞれ諸様式をどう感受するのか､SD 法を用いて質問紙調査を行う。結果は、グラフ化して、様式や年齢段階による相違を検討し、様式把握の実態を可視化する。
3. シソーラスの内容の検討：小・中・大学生を対象に選択式・記述式の質問紙調査で諸様式を表す感情語を収集し、上記 1.2.の調査から抽出した感情語と総合して、シソーラス内容を検討する。
4. (1)教材作成:上記シソーラスを用いて様式をキャッチフレーズ化して教材を作成する。具体的にはキャッチフレーズを読み札、作品画像を絵札としたカルタの作成をする。即座の判断が求められるカルタは、直観的に把握される様式の感受･理解に適した教材と考える。また、児童生徒がカルタの読み札として、キャッチフレーズを作成する発展教材も作成する。児童生徒によるキャッチフレーズ作成は高難度であるが、シソーラス使用によって容易にする。(2) 協力校での実践：島根県･茨城県の小学校･中学校で実践する。授業の実際、カルタやアンケートの回答等を分析して、教育的有効性を検証する。

４．研究成果

1. 戦後の代表的な日本美術史概説書の調査から様式記述用語について以下のことを解明した。

(1)戦前の文学性志向の感情豊かな表現に対して、戦後は科学性志向から曖昧な感情をおさえて正確･確実な知識を記述するのが特徴であった。そして昭和末から平成にかけて再び感情豊かな表現へ推移しつつある。

(2)戦後の美術史記述では、感情語使用頻度は３％前後で、現代に近づくにつれて増加傾向にあった。

(3)様式ごとに用いられた感情語の頻出度や特性に違いがあった。

(4)例示語や比喩的な表現に踏襲が見られ、専門家も美術について表す語彙を学習･獲得していくといえる。

以上の研究成果は、第 36 回美術科教育学会奈良大会で口頭発表した（2013 年 3 月 28 日、奈良教育大学)。

2. SD 法による児童生徒の日本美術作品感情プロフィールを以下のように解明した。

仏像 7 様式について、小学校･中学校･高等学校の全学年の児童生徒及び大学生･専門家(合計 1748 人)を対象に、SD 法による質問紙調査を行い、様式ごとの感受実態と、調査協力者群ごとの感受実態を明らかにした。

様式ごとのプロファイルは、小学４年生以降ほぼ同形となること、各様式プロファイルの特徴（図 1)、７様式のプロファイルが３類型に分類できること(図 2-4)を明らかにした。

さらに学年ごとのプロファイル(図 5､6)は、小学１－３年生では様式ごとの差異がないことからどの様式仏像も仏像一般として感受していること、学年･年代が上がるにつれて様式感受は分化していくこと、小学４年生で様式感受が明確に分化･明確することを発見できた。それによって仏像の様式の感受をねらう鑑賞授業は小学４年生から行うのが妥当であることがわかった。

上記の研究成果は、美術科教育学会誌『美術教育学』第 35 号(2014 年)及び第 37 号(2016 年)に論文発表した。

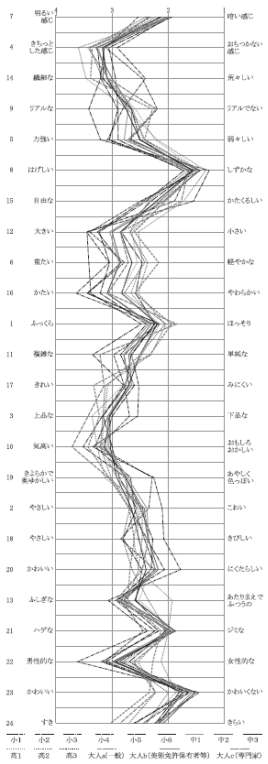

図１　様式ごとのプロフィール（飛鳥仏の場合）

※飛鳥、白鳳、天平、平安前期(密教)、平安後期(定朝様)、慶派、円空の７様式について実施した。紙幅の都合上、飛鳥仏の例のみ示す。

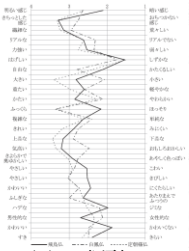

図２　類型Ａ
(飛鳥･白鳳･定朝様)

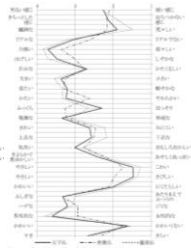

図３　類型Ｂ
(天平･密教･慶派)

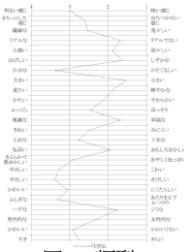

図４　類型Ｃ
(円空)

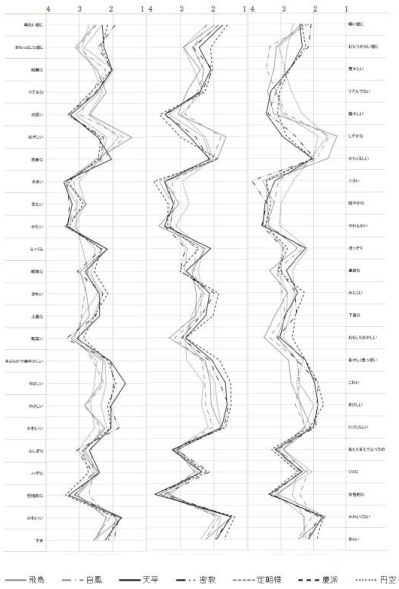

図５　小学 1-3 年生のプロファイルの変容

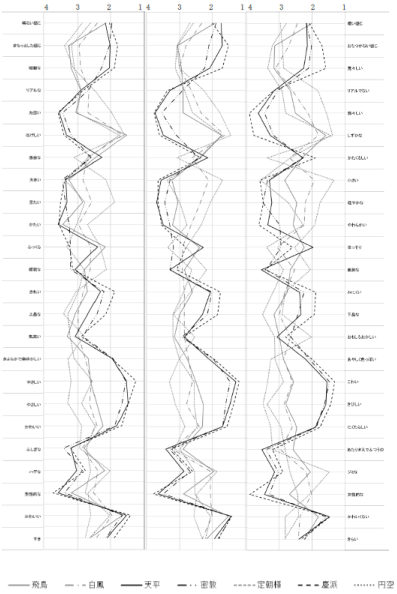

図６　小学 4-6 年生のプロファイルの変容

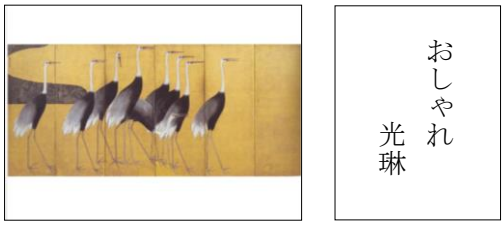

図７　カルタ教材（光琳の場合）

3. 美術史記述調査から抽出した感情語、SD 法の質問紙調査で用いた形容詞対、小学生･中学生･大学生への選択式･記述式の質問紙調査で収集した感情語を総合して、美的質ごとに類型化し、年齢段階に応じて語彙の難易度を整理したものをキャッチフレーズ用シソーラスの内容であると解明した。

4. 教材を作成して授業実践し、以下のことを確認した。

(1) 絵画作品及び彫刻作品の時代様式、流派様式等の感受･理解をねらったキャッチフレーズを読み札とするカルタ教材（図 7）やクイズ教材、児童生徒がキャッチフレーズを作成する教材を作成できた。さらに、キャッチフレーズに用いる言葉、比較する様式の組み合わせや数を対象者の年齢段階に応じて調整できた。

(2) 主に江戸時代の絵画の様式キャッチフレーズ教材を 2015 年及び 2016 年に島根県と茨城県の国公立の小学校及び中学校で実践できた。

(3) 授業の実際及びアンケート回答等の分析の結果、理解と楽しさの両面で本教材の教育的有効性を実証できた。特にカルタは様式の感受･理解に適し、児童生徒が楽しく熱中して学べる教材であることが確認できた。

(4)授業者は研究代表者、協力校教諭のどちらであっても、実践地は島根県･茨城県のどちらであっても、同様に好結果を得られた。これらのことから、本鑑賞教育方法が授業者や地域といった偶然性や条件によらず、一般的な妥当性をもつと確認できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
(1)有田洋子、日本美術の諸様式を言語化して理解させる鑑賞教育方法(3)―小学生の仏像様式の感受の変容―、美術科教育学会学会誌美術教育学、査読有、2016 年、第 37 号、39-47 頁。
(2)有田洋子、日本美術作品を学習する教科の考察―社会科で学ばれつつある美術―、大学美術教育学会誌美術教育学研究、査読有、第 48 号、2016 年、25-32 頁。
(3)有田洋子、日本美術の諸様式を言語化して理解させる鑑賞教育方法(2) ―SD 法による仏像様式感情の全学年調査結果とその考察―、美術科教育学会誌美術教育学、査読有、第 35 号、2014 年、45-59 頁。

〔学会発表〕（計２件）
(1)有田洋子、日本美術の教養形成媒体の考察―他教科で学ばれつつある美術―、第 37 回美術科教育学会上越大会、2014 年 3 月 29 日、上越教育大学（新潟）。
(2)有田洋子、日本美術の諸様式の記述言語調査－美術史記述コーパス及び学習者コーパスの構築・分析を通して－、第 36 回美術科教育学会奈良大会、2013 年 3 月 28 日、奈良教育大学（奈良）。

〔図書〕（計２件）
(1)分担執筆:有田洋子、第 8 章 6 琳派の鑑賞（170-171 頁）、第 8 章 7 浮世絵の鑑賞（172-173 頁）、第 8 章 11　比較をしながら見る（180-181 頁）。
編著:辻泰秀、図画工作・基礎造形－美術教育の内容、建帛社、2016 年、総 209 頁。

(2)分担執筆:有田洋子、第 5 第図画工作・美術科教育の充実をはかる教材開発。
編著:池永真義、図画工作･美術科の理論と実践 第 7 巻－新しい表現と鑑賞の授業づくりのために－、あいり出版、2016 年。

６．研究組織
(1)研究代表者
有田　洋子（ARITA　YOKO）
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：70598143

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし